

---

# 世界を渡る召喚士

学生ひきニート

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界を渡る召喚士

### 【Z-マーク】

Z3096Z

### 【作者名】

学生ひひき一ノ一

### 【あらすじ】

世界を渡る召喚士が物語る。世界の「変化」を求めて。  
---この小説は主人公視点でお送りしています。

「んで、君が今回応募した理由を聞きましょつか？」

「まあ、これでも結構色んなところに行つたことがあるので、そろそろ別のところに行つてもいい機会かなーと思つて」

「なるほどね。うん採用。君の適正に合ひそつたところに送るからそこから入つて」

「ども」

俺は目の前にいる奴にそう言われて、そいつの後ろにある扉の中に入つていった。

扉の中に入り、外に出ると、そこは何も無い平原だった。

後ろを振り向くと、そこには同じ風景が広がっている。扉なんてこの風景に不釣合いなものはない。

成功だ。

話に聞くところによると、かなり確率は低いがたまに失敗することもあるらしいので、一安心だ。

俺は、取り敢えず歩き始めた。

さつきの面接は、……正式名称は知らないが、簡単に言えば、「世界を渡るための面接」だ。

世界を渡るというのは、別に大げさに言つていいわけではなく、今

いの世界から別の世界に行くことだ。

各世界には、世界を維持する「均衡」という概念の他に世界を変える「変化」という概念を必要としている。

これはどの世界にでもいる神信深い者からすれば、傲慢と捉えられるかもしれないが、世界というものは人が動かしている。つまり、この「変化」というものは人によって作られる。

それは、その世界の住人がその世界を変えるのではなく、その世界の常識や定義といったものを根本から覆すような者によって引き起こされるものだ。

俺は俺たちのようなやつらを「渡り人」と呼んでいる。

渡り人の仕事は至極簡単で、自由に行つた先の世界で過ごすことだ。それだけで、世界に大きな変化を生む。

変化はやがて常識や定義となつて、世界に浸透し、世界が腐敗しないように働きかけるのだ。

というわけで、俺は新しい世界へと、たつた今降り立つたのだ。

ファンタジーな頭の持ち主には羨ましがれるかもしれないが、その世界で生きていくのに必要なものは自分で調達しなければならないし、知識もなく、人脈もなく、雨風をしぶぐ家もないのだから、割りと来た当初は苦労する。

俺が担当するような世界は、大抵言語でコミュニケーションを取る文化があるところなので、そういうところでは実は苦労が少ない。なぜなら、俺には「共通語力」というものがあるので、俺が何を喋るかと相手にこちらの言葉の意味を伝えることができるからだ。よつて、当面の目的は、「拠点づくり」と「生活力の確保」である。

「召喚せしは、『タンサクソウサ』」

俺がそう唱えると、目の前の風景に歪みが生じ、その中からウーという生物のように種類豊かな望遠鏡をハリの代わりに生やしたもののが現れる。

「応えしは、我、『タンサクソウサ』」

『それ』はやう応えて、俺の前に浮かび続ける。

『この付近に人がいそなうを探してくれ』

「了解した」

『タンサクソウサ』はそのまま上空に浮かび上がり、じぱりくゅつくつと宙で回転を続け、その後少しして回転を止めた。

「ここより西方に、主が足で三半刻の場所に人の群れを確認した」

「わかった。ご苦労さん。戻つていいぞ」

「了解した」

そう言って、そのまま『タンサクソウサ』は霧のよつに消えていった。

俺は言われた通りに西に足を進めた。

さつきのは、俺が持つ唯一の能力である「召喚術」。

まあ詳しい説明は、追々するとして。

俺が渡り人として、やつてけるのも、この能力があるからだとも言える。

この物語は、俺が勝手に「」の世界で過ごしていく、なんの変哲もない、他愛のない日記のよしなものだ。  
だから、暇なやつが暇な時に適当に読むことを薦める。

さて、新たな俺の物語を始めよ。

## 門番

三時間ほど歩いて俺が辿り着いたのは、程々の高さの外壁に覆われた港町であった。

淡い砂色の外壁は、海の青と潮風と陽の光の強さと相性がよく見えた。

俺は港町の門に近づく。

門に近づくに連れて、行き交う人の波が目立つてくる。  
俺は港町に入るためには、門番を探した。

門番をすぐに見つけた俺は、軽装の鎧を見に纏つたその門番に話しかけた。

「ども」

「ん？ 何かようか？」

「この町に入りたいんだけど、いいか？」

「んん？ 変なことを聞くやつだな。入りたければお前のその足で入ればいいだろ？」

不思議そつに門番は首を傾げる。

「ああ、そつなのか。悪いね。てつきり許可がいるのかと思つて」

俺がそつと門番は軽く笑みを見せた。

「はははー、変なことを言つやつだな。どつかのお国の城下町じゃないんだ。そんなことせんよ」

「そつなのか？ 駆輪とかするやつだつているだろ？」「？」

「そんのは勝手にやらせておくよ。第一、後ろ暗いものを運んでいれば、この門にある『解析』の魔法が反応するだろ？ からな」

ふむ、そんなものがこの世界にはあるのか。

魔法がある世界は2回行ったことがあるけど、常時発動している魔法を見たのは初めてだな。

門番は俺を見て、さらに言葉を続ける。

「むしろお前みたいに、俺に話しかけるようなやつのほうが、怪しいぐらいだよ」

「ああ、それは済まない。まあ悪さはしないから安心してよ」「はは、どうせどこかの田舎から出てきたのだり？ 俺も暇だつたからな。簡単にいいならこの町のことを教えてやるつが？」

「それは助かるな。是非頼む」

そうして俺は、この世界で初めて会話をした門番の男からこの港町のことを教えてもらった。

町の名前は「ゼー」

意味は、町のシンボルにもなっている渡り鳥の鳴き声からとつたらしい。

渡り人の俺としては、縁起のいい話だ。

この町の特徴としては、予想通り海産物の輸出が大きな産業となっている。

海産物は「水」と「風」の合成属性である「氷」の魔法がかけられた出荷箱に収められて各地に輸出されている。

町の建物の構成としては、

「町役場」「商館」「海師場」「宿泊施設」「各種ギルド」などが俺が気にすべきものとなる。

「海師場」というのは、俺が一番最初にいた世界の漁業組合とほとんど同じものだ。

「各種ギルド」は、

- 「戦士ギルド」……モンスター退治などの荒事専門。
- 「採掘者ギルド」……薬草採取や鉱石採掘専門。
- 「僧侶ギルド」……この世界の神を信仰し、人々の回復専門。
- 「魔法ギルド」……魔法研究専門。
- 「盗賊ギルド」……人に頼めないようなこと専門。

ギルドはこの5つがこの街にはあり、城下町のような大きなところに行くと、さらに他の専門ギルドがあるらしい。

「盗賊ギルド」は禁止している町もあるため、他のギルドに関しては大抵の町と呼べる大きさのところにあるらしい。

俺は簡単にこれらのことを見聞した後、町に入り、まずは手持ちの異世界のものを換金してから、各ギルドを回ることにした。

## 戦士ギルド

質屋で所持品といひの世界の通貨を交換した俺は、戦士ギルドへと足を運んでいた。

ゼーの町の戦士ギルドは、堅牢な石壁で建てられていて、テカデカと木製の看板を入り口の上に掲げていた。

入り口の脇の石柱には、「腕に自慢があるなら戦士ギルドへ!! 新ギルドメンバー募集中!!」と豪快に書かれたポスターが貼つてある。

俺はそのポスターの印象で、このギルドがどういふやつらがいるのか予想しながら、戦士ギルドに入つていった。

「んあ？ 依頼ですかい？」

入つてすぐ目の前にある受付にいる以下にも脱力している男が話しかけてきた。

無精髭に、寝ぼけた目の中肉中背の男で、髪と服装だけは、少し乱れているぐらいでまだマシといった風貌だ。

「いや、」のギルドがどういふものか聞きに来ただけだけど「んだよ。冷やかしかよ」

男は依頼ではないと知つて、面倒くさそうな口調になる。

「んで説明を聞きたいんだけど」

「あーん？ 入団しに来たんじゃないなら帰つてくれ。こちとこり色々と忙しいんだよ」

どう見ても忙しそうには見えない。

こんな接客能力が無いやつが受付で、このギルドが機能しているのか疑いたくなつた。

「ちょっとガルさん。どうせ暇してるんだから、そのぐらいしてあげなさいよ」

後ろから聞こえてきた声の方を向くと、入り口ホールのテーブルに腰をかけている一人の女がいた。

赤めの茶髪に、ハツキリと開かれた目、愛嬌のある表情でこちらを見ている。

「うつせえなエイル。じゃあお前が説明してやれよ」

「あなたの仕事でしょそれは」

「ほら、お前。そこに座つてるやつから説明を聞いとけ。入団する気になつたら俺のところに来い」

そう言ってガルと呼ばれた男は、ダルそうに机に伏せた。  
俺は言われたままにテーブルに腰掛けている女のところに足を運んだ。

「悪いわね。ああいう人だけど、あれでもそれなりに腕の立つ人なのよ」

そう言って、軽く笑みを浮かべながら、女は俺に対面に座るよう手で促した。

「そんな風には見えないけど、人は見かけによらずつてやつか?」

「ふふ、まあそんなところよ」

俺はテーブルの席に腰をかけた。

「改めまして、私はエイル。このギルドの5番隊の隊長をやつてる  
わ」

「これは丁寧に。俺は……」

さて、なんて名乗るつか？

……まあ、別に本名でいいか。こうこう小さことこうども世界に影響を及ぼるのが俺達の仕事だしな。

「ケンイチだ。よろしく

「珍しい名前ね。どこの出身？」

「ここから西にかなり行つたところにある小さな村を」

こうこうの場合、当たり障りのない適切なことを言つておくの常套手段である。

いきなり、異世界からだと言つても、変人扱いされて動きづらくなるかも知れないしな。

「へえ、そうなの。まあ戦士ギルドは出身地に関係なく、とにかく腕に自信がある人なら大歓迎だから大丈夫よ」

「それは助かるね」

あれこれ条件出されても困るしな。

「それで、今日は説明だけでいいの？」

「ああ、しばらくなこの町を拠点に活動しようと考えてこるから、どのギルドに所属しようか決めているところだ」「なるほどね」

納得がいったようにエイルはうなずく。

「まあ、説明と言つても、あれこれ細かいことはあまり無いから安心して」「わかった」

そのぐらいが丁度いいと思ひ。

「取り敢えず、このギルドの主な活動は、簡単に言えば『戦闘が必要な依頼を請け負い、解決すること』よ」

「まあなんとなく想像できるよ」

「ふふ、そうね。仕事内容の多くは、モンスター討伐になるわね。あとは、護衛の任務も結構あるわ」

「なるほど。わかりやすい」

「でもわかりやすい分、荒事が多いから、失敗は許されないし、怪我が致命的になることもあるから注意してね」

「ああ、わかった」

「まあ詳しい依頼の受け方とかは、入団してから説明を受けるから、もし入団したら聞いてね」

「了解」

エイルの説明は回りくどくなく、わかりやすい。

「あと、入団する際は、『入団試験』があるから、受けた気があったら、受付で手続きして」

「入団試験って何をやるんだ？」

「それは担当になつたギルドメンバーが決めるから、これだ！って、いうのは無いわね。気分で内容を変えることなんてよくあることよ」「なるほど」

「必要なのは、腕つぶしと臨機応変に動けるから、その辺を意

識して受けければ大丈夫よ」

「……それは教えていいのか?」

「大丈夫よ。意識しても出来ない人なんて山ほどいるから、この程度の情報は問題ないわ」

「納得した」

なるほど。

大体このギルドが何をやっているかはわかつたな。

「ありがとう。大方わかつたよ」

「そう。なら良かつたわ。あなたが実力のある人だったら、この戦士ギルド『ドーデン』はあなたをいつでも歓迎するわ」

「ああ、情報ありがとう。それじゃあ」

俺は机に銀棒（この世界の通貨は棒状のものである）を一本置いて、出口に足を運んだ。

「あら、別に良かったのに」

そう言いつつも、一いつ瞬とした笑みを浮かべているエイルを少し見て俺は戦士ギルドを後にした。

次は採掘者ギルドに足を運ぼう。

## 採掘者ギルド

採掘者ギルドは以外に早く見つかった。

とこつより、戦士ギルドから田視できる位置にあった。

採掘者ギルドは、重厚感ある木造の建物で、その建物にそぐわない煌びやかな看板が掲げられている。

安物の鉱石ならいいが、高価なものだつたら盗まれるよな。絶対。案外知らないうちに、一個ぐらい減つていいかもしねない。

俺は、入り口の横に貼つてあるポスターに目を配る。

「根気のある人隨時募集中。私たちと一緒に夢を追いかけませんか？」

……夢を掴みましょつぐらいは書けなかつたのかと少し思いながらも、俺は採掘者ギルドに入つていった。

「よつこじ採掘者ギルド『ミレラリオ』へ！」

「あ、ども」

開口一番元気の良い挨拶を受付の女がしてきた。

ついつい先ほどの戦士ギルドとのギャップに戻込みしてしまつた。

「本日はどうな御用ですか？」

「ああ、このギルドに入るか決めかねて、その説明を聞きたいんだが……」

「はい。畏まりました」

ふむ。このギルドは（受付の）感じが良くていいな。

「では、『ご説明しますね』

「よろしく」

「『このギルド』では主に、採集・採掘の依頼を請け負って、それを解決いたします」

「例えば、どんなことをするの？」

「簡単なものですと回復薬の原料となる薬草の採集を行なったり、装備品などの製作に使う鉱石を取つてくるなどです。難易度が高い依頼になりますと、古代遺跡の調査などですね」

「へえ、そんなものまでやるんだ」

「はい。この町では滅多にこういう依頼は来ないので、あまりないんですけどね」

そう言って、受付嬢は苦笑いする。

あまり期待はしないでおこつ。

「遺跡が近い町や大きな街ですと、それ専門のギルドがあつたりするのですけどね」

「まあ、そういうのにまだ興味はないので、大丈夫ですよ」

「そうですか。では、説明を続けますね」

受付嬢は一呼吸入れて、説明を続けた。

「わたくしのギルドへの入会は、どなたでも可能です」

「戦士ギルドみたいに入会に試験とかはあるのか？」

「いえ、『ございません』。ギルドへの入会の際は、簡単な書類を作成して終了です」

「へえ、それだけでいいのか」

「はい。しかし、注意点が『ござります』

「注意点？」

「はい。依頼を受ける際に、契約金を、依頼を担当する方が支払う義務がござります」

「どのくらい払うの？」

「それは、依頼内容によって異なります。依頼難易度が高いほど、契約金は高くなります。これは、依頼失敗の際に依頼者への謝罪金と、ギルドの信用を損なった罰金として徴収致します」

「依頼を達成したときは、契約金は返ってくるの？」

「はい。全額をお返しいたします」

なるほどなるほど。

これは割りと信用できそうな感じだ。

「ありがとうございます。他に注意点はある？」

「はい。後は、これは我々の希望なのですが、根気のある方が入会していただけないと助かります」

「と、いうと？」

「はい。依頼内容が……その、まあ地味で、単純ですので、やめてしまわれる方が多いんですよね」

ハハハ、と受付嬢が乾いた笑いをする。  
確かに、飽きるよなー

「わかったよ。説明ありがとうございます」

「いえ、もし興味を持たれましたら、是非ご入会下さい」

「ああ、それじゃあ」

俺はそう言つて、採掘者ギルドを後にした。  
建物を出て、もう一度俺はポスターを見る。

……確かに、夢を追いかけるが正解だな。

そう思いつつ、次に向かう先は、‘僧侶ギルド’だ。

## 僧侶ギルド

僧侶ギルドは、町の北よりの外壁沿いに建っていた。建物は、側面を白い外壁に、正面を黒と黄色い横線のラインが入ったもので建てられていた。

一瞬、邪神崇拜かなにかだらうかとも思つたが、文化なんてものは、人が勝手に作り出したものなので、気に留めないことにした。

入り口の脇に建てられた掲示板の高そうな紙を使つた張り紙には、

「神はあなたの全てを見ている」

……  
怖っ！！

なんか説明を聞く以前に、本能的に回避したくなつた。  
しかし、見た目だけで判断するのは早計、よくない。

ということで、俺は僧侶ギルドの開かれた門に入つていった。

中に入り少し俺は驚いた。

天井まで吹き抜けて、建物の奥まで見渡すことができる造りで、奥にはおそらく信仰している神像が掲げられ、その下を壁にそつて三段に分けられた椅子が並び、それを取り囲むように真ん中に台座があつた。

まるで、公開審問をするかのような造りの礼拝堂だ。

「こなんにむかは

俺が見慣れぬ造りの礼拝堂にカルチャーショックを受けていると声をかけられた。

その声の方を向くと、一体の中心のラインを胸から足元までを黒と黄色の基調で彩られた白い外套を着ている女がいた。

「初めてお見受けする方ですね」

「ああ、この、ギルドに入るか決めかねてているから、一応説明だけを聞きに来たのだけど」

「まあ！ではあなたも『アルハン』様の御加護を受けに来た方なのですね」

キラキラとした目で俺を見る女。

「いや、その、『アルハン』サマのことがまず分からぬいけど」「まあ！」

俺がそう言つと、女は驚いたように目を丸くした。

「失礼しました。アルハン様をご存知ないのでしたら、信仰を求めて来られたのですか？」

「いや、単にどんなギルドか気になつただけで……」

「…………」  
「…………」  
「…………」

彼女は表情が固まつたまま無言になってしまった。

ひとつ言つておかなくてはいけないことがある。

渡り人だからって、別に世渡りが上手いわけじゃないのよ！

さて、どうするか。

ここは大人しく帰ろうか？

俺がそう思つた矢先、女は表情を和らげて話しかけてきた。

「これも、きっとアルハン様のお導きでしょう。分かりました。アルハン様の素晴らしいお教えしますわ」

「え、いや、けつこうで」

「アルハン様は」

「

俺の言葉を無視して、女は話し始めた。  
仕方なく、俺は耳を貸す事にした。

彼女の話では、

- 1・アルハンといつのは、この世界を作つた神らしい。
- 2・全てのものに恵みと祝福を授けてくれるらしい。
- 3・黒と黄色の組み合わせはこの世の混沌を示すらしく、それを清らかに包みこむための白色だとか。
- 4・黒と黄色を使つているのは、その混沌があることを忘れず、なお清く生きるための教えだとか。
- 5・祈りはアルハンに届き、御加護を得ることができるとか。
- 6・彼女も重い病が治つたらしい。

「病が治つたつてどうやつて？」  
「特効薬を飲みました」  
「？」

「それって薬のおかげじゃ……」

「いえ！アルハン様があの薬まで私を導いてくれたお陰です」

……駄目だ。」「イツ。

「あ、説明ありがとわ。じゃあ俺はこれで！」

俺は足早に出てこようと云った。

「ああ、まだアルハン様の素晴らしいところの一部も話してしませんの」「また今度で！」

俺は風の如くその場を去った。

取り敢えず、僧侶ギルドは選択肢から外すことになります。  
まあ、次は魔法ギルドだ。

## 魔法ギルド

魔法ギルドは何やら奇妙な建物だった。

何が奇妙と言えば、まず、建物の構造として奇妙だった。

まるで木が枝分かれしたようにそびえ立つ塔がいくつもある。

一言でいうと『もつねり』した感じだ。

入り口だけはまともで、その横には「触れて下さい」と書かれて板があつた。

だから触れてみた。

すると、宙に文字が浮かび上がり、「魔法を究めんとする者に、道は開かれる」と書かれていた。

俺はこの世界にきて初めて少しワクワクした。  
少し期待しながら、俺は中へと入つていった。

中に入ると、空中を彷徨う四角い物体、色が次々に変わっていく柱など色々なものがあるホールだった。

受付は目の前にあり、下を向いている女がいた。

俺は近づいて話しかけた。

「ども」

「…………」

「もしも」

「…………」

「あの~」

「…………」

女は何やら手元にある本に集中しているらしく、まるで「ひりて氣

づきもしない。

俺はどうするか考えていると、受付の脇に、「御用の方は鳴らして下さい」と書かれたベルらしきものを見つけた。  
ダメ元で俺はそのベルを鳴らしてみた。

ドガガガガガガガ…ドギヤーーン…！

「ひゃああああ…！」

「うおおおお…！」

てつくりもつと淑やかな響きの音かと思つたら、とんでもない騒音  
だつた。

まるで、パソコンの起動音を爆撃音にされた気分だ。

「あわーあわわわ」

女は持つていた本を落として、ずり下がつたメガネを慌ててかけ直  
した。

「ああーすーすみません。本に集中して…」  
「いえいえ」

女は少し落ち着くと呪まつたように何度もペコペコ頭を下げた。  
俺もついつい許してしまつ程だ。

「すみませんでした。それで、どのよつな御用でしょうか？」

「ああ、このギルドに入らうか迷つてこらんだけど、まずは説明を  
聞きたいんだが」

「ああはい。入学希望の方ですね」

「入学？」

「ええ、対面的にはギルドとしていますが、本来の活動は学校のようないいもので」  
「なるほど」

ギルドだが、魔法を研究するというだから、学校として機能しているのか。  
ところが、この世界には学校という施設があるんだな。どの程度かは分からぬ。

「ではまず、こちらに触れていただけますか？」  
「ん？ これは？」  
「あなたの魔法力を調べるものです。素質がない方は残念ですが入学は許可出来ないので」  
「なるほどね」

素質が無ければ、努力のしようもないもんな。  
俺は言われた通りに、四角い透明な箱に手を触れた。

触れたが、箱には何の変化もなかつた。

「ああ、残念ですがあなたには魔法の素質がありません」  
「そうか。まあ俺も期待はしていなかつたけど」

「だつて俺、召喚士だもん。  
召喚する時、MPみたいなものは使つけど、実際にこの世界で、いつところの魔法力じやないし。  
本当に期待なんかしてなかつたよ。本当だよー」

「まあ、折角来たんで、このギルドの説明だけでもお願ひするよ」  
「ええ、その程度でしたら」

そつとつてメガネをかけた女は快く引き受けてくれた。

「『Jのギルドは、簡単に言いますと『魔法』を研究し、その成果を売ることで運営されています」

「成果を売つていうのは？」

「簡単なところですと、例えば薬草の効用を最大限に引き出すために魔法を使い、それで出来上がったものがポーションです」

「へえ、つまりポーションはここで調合されてるわけだ」

「そうですね。後は、新しい魔法技術を発明して、その方法を売ることなどが大きなものとして挙げられます。良い研究成果であれば、その国のお抱え魔法士になれる場合もあるんですよ」

「なるほど」

「まあ私どもギルドではそういうことはまだ一度もないのですが」

「はは、頑張つてくれ」

「この世界で魔法といつものが、割りと重要な扱いであることがわかつたような気がする。

「大雑把ですが、説明できるのはこれぐらいですね。何かご質問はござりますか？」

「うーん。そうだな……」

俺が何か聞こうか迷つていて、視界の隅ある扉が開いた。  
そこに現れたのは、真紅のローブを着た女だった。

「アリッサ！ お願い！ あと少し研究費用を私のところに回して！」

「……またですか」「ーリアさん」

「コーリアと受付のアリッサに呼ばれた女は、俺のことはお構いなしに受付の前を陣取った。

「あとちょっとなの！ あとちょっとで、研究が完成するのよ…」  
「前もそつ言つてたじゃないですか。学長からじばらべコーリアさんには費用を出さないようになに言われてますから無理です」  
「あのクソジジイー。……ねえ、いいでしょ？ お願い  
「猫がぶつても無理なものは無理です」  
「けちーー..じけちーー！」

完全に空氣です俺。はい。

「じゃあ、俺はこれで……」

俺は出ていくことにした。  
が、服の袖を誰かに掴まれた。

「…………あの」

俺が袖を掴んでいるコーリアに話しかける。

すると彼女はニヤリと笑いこちらを見つめてきた。

「ねえ？ お兄さん？ 私に資金援助しなあい？」  
「しないが？」  
「即答！？ ちょっと酷くない！ こんな美女がお願いしてること…」  
「俺の好みはもっと淑やかな女性なんで」

俺がそつと彼女はすっと身を整えて、控えめこいつった。

「お願ひしますわ。あ・な・た」

「いや、やっぱり強気なしたかな女性が好みで……」

「どんと私に任せて投資しなさい！」

「一コアは胸をドンと呑いて高々に宣言する。」

「いや、実はもうと淫靡な感じの女性が好きだから……」

一夜の方もサーキスしてあ・け・るう

「コーリアは体をクネラせて、寄り添うようにして俺の耳元でそう囁く

8

いやいや 本當はもとと甘える感しの年下の妙的な女の子が……

コーリアは上目遣いで、自を輝かせながら満面の笑みで俺に言う。

「あんた面白いなー

「ホント！ じやあ資金援助してくれる！？」

俺はニヤリと笑い、彼女も期待に満ちた目をして、

「だが、  
断る！」

なんてからかいがいのある女だろう。

「もういいから有り金全部置いてきな！」

「コーリアはキレたのか俺の襟首を掴んで脅してくる。

「受付のお姉さんどこかして」

俺がそう頼むと、アリッサは拳ほじの大それの球体を手に持つひつ  
言つた。

「町の自警隊に通報しました」

「いやあああ！やめてええええ！つさーつさーです！」

「コーリアはその場で悶える。

「 もうー、どうしたら資金援助してくれるのよー。」

怒った様子の「コーリアは、その場で地団駄を踏む。  
その様子を見て、俺は一言こいつた。

「 そのままの君が可愛こよ

「 はあ！？ ちょ、ちょっと、このタイミングで口説くとか、い、  
意味分かんないんだけどーーー」

「コーリアは、そういうものの照れたように頬を赤くし、顔を背ける。  
そしてそんな彼女に俺はこう言つた。

「あ、リップサービス、ギラ（この世界の通貨の単位）になります  
「死ね！死んでしまえ！？ もう知るか！ つわーーーん！」

そう言つて「コーリアは、建物の中に帰つていった。

「なんか騒いでわるかつた」

「いえ、うちの学生がご迷惑をおかけしまして

「いや、楽しかったからいいよ。それじゃあ俺はこれで」「はい。何か御用がありましたら、『魔法ギルド』『レー・テス』にまたお越しください」

俺はそりやつて魔法ギルドを後にした。  
なかなか面白いギルドだった。

さて、最後は盗賊ギルドだ。

## 魔法ギルド（後書き）

戦士ギルド『スラッシュ』から『ドードー』に変更。  
ダサかつたので

## 盗賊ギルド

盗賊ギルドに足を運ぶと口が暮れそうだったので、俺は先に宿屋を探した。

最初に見つけた宿屋は一泊8ギラとお手軽な値段だったので、そこに決めた。

この世界の通貨は、鉄棒<sup>ベリ</sup>＝10円、銅棒<sup>ギラ</sup>＝100円、銀棒<sup>ジラ</sup>＝1,000円、金棒<sup>セラ</sup>＝10,000円という形で成り立っている。つまり8ギラは800円として計算できるので、かなり感覚としては安いと分かるだろう。

そういうことで、宿の決まつた俺は、夕暮れと共に盗賊ギルドのある場所に向かつた。

人に聞いてようやくたどり着いた盗賊ギルドは、清潔感のない建物で、場所も町の中でも狭い路地を通らないと来れないような分かりにくい場所にあった。

如何にもな感じを漂わしている。

しかし、これより危なげなところに、他の世界でも行つてきた俺は、別段躊躇すること無く入つていった。

建物の中は、大きなホールになつており、ホールの中にはテーブルがいくつか置いてあり、奥にバーのように酒が並んだカウンターがある。

カウンターの脇には階段があり、二階の部屋につながつているようだ。

ホールのテーブルに腰掛けている男たちは如何にも荒くれ者といった感じで、品性という言葉には無縁な人間だろう。

男たちは入ってきた俺をジッと睨むように視線を浴びせた。

俺は取り敢えず、奥にあるカウンターにいるバーテン?に話しかけるため、足を進めた。

カウンターの席に座ると、バーテンがこちらを見てきた。

「…………」

しかし、バーテンは何も話さない。

しばらく、バーテンが話しかけてくるのを待つてみると、バーテンは顎を上げて自分の後ろにある酒棚を指した。  
酒を頼めといふことだらう。

「あなたのオススメで頼む」

俺がそう言うと、バーテンは黙つて体を動かして、すぐに瓶に入った酒をグラスに注ぎ、俺の前に置いた。

俺は少し口をつけると、深みのある味わいが広がり、悪くないと思つた。

「依頼は?」

唐突にバーテンが口を開いた。

どうやら俺を依頼人と間違えているらしい。

「いや、このギルドが何やつてるかの説明を聞きに来たんだが」

「…………

バーーンはもう話すことがないかのようにいつに俺から距離をとった。そしてその後すぐに爆笑の嵐がホールに響いた。

「おいおい。聞いたかみんな！『このギルドが何やってるかの説明を聞きに来たんだが『だつてよーギヤハハハ！』

そつ言いながら、俺に近づいてきたのは、ガラの悪いやせ細った男だった。

「お前、馬鹿か？ それとも頭でも腐ってんのか？」  
「いや、本当にことだ。説明を聞きに来ただけだ」

俺がそつ答えると、男は下品にまた笑つた。  
そして俺の襟首を掴んで「いつ言つた。

「ばあああかか？ テメ。このギルドにそんなもんはねえよ。『金になる依頼は何でも受ける』それだけだ」  
「ああ、なんだお前が説明してくれるのか？ 悪いな？」  
「あつ！？ ふざけんのかテメ？」

男の顔が険しくなる。

このチンピラはどいつも短気らしい。

「ま、よつは済んだみたいだから帰るよ」

俺がそつ言つて男の手を振りほどいて、出口に向かおうとするヒチンピラがその進路を塞いだ。

「バーか、逃すわけねえだろ？ 痛い目見たくなきや身ぐるみ全部置いてって、返つて母ちゃんのおっぱいでも吸つてな！」

チンピラAは「ヤーヤと笑い、「そんな」と言つた。  
その返しとして俺は取り敢えず、「」と言つた。

「顔を近づけるな。息が臭い」

「んだとつ！」

「臭つー」の世のものとは思えなこほど臭つーマジ止めてー。」

俺が鼻をつまんで、嫌悪感を丸出しの表情をする。  
いや、本当に臭いんだよ。

するとチンピラAは顔を真っ赤にして、青筋を立てた。

「て・テメエ。ぶ・ぶつ殺してやるー。」

チンピラAは懐からナイフを取り出して、構えた。

俺は、どうしたものかと安い挑発をしてしまったと後悔しつつ思つてゐると、一息間を置いて、ホールが急に静かになった。

「何を騒いでやがる」

野太い男の声の方を振り向くと、そこには一階から降りてくる髭面の男がいた。

「だ・ダンナ……」

「おつ・パツチ。テメエ何してやがる」

髭面の男は、険しい顔でチンピラAを睨む。

チンピラA改め、パツチはそれだけで、体がすぐみ上がつてしまつ

た様子に見えた。

「だ・ダンナ。」この野郎が俺をバカにしやがったんですね…

…

「あ？ テメはそんな理由で、俺のこの『黒猫の宴』を薄汚ねえ血で汚そうとしやがったのか？」

「す・すいやせんでした！！」

パツチは髭面の男に凄まれ、その場で膝と両手をついた。また俺空氣ですか。

「じゃ、俺帰るんで」

「待ちな坊主」

俺がそう言つて立ち去つたとすると、呼び止める声がかかった。

「なに？」

「テメも誰に断つてこの場所に入つてきてんだ？」

「いや、誰にも断りなんか入れてないけど？」

「あん？」

俺の態度に、髭面の男は眉をひそめた。

「オメエ、何のよつてこに来やがった」

「このギルドの説明を聞きに来ただけだけど」

「……それでこの騒ぎか」

「あなたが收拾つけてくれて助かっただよ」

俺はにこやかにそう答える。

髭面の男はそれを見て、口を開く。

「死にたいのか？」

男がその言葉を発した途端、場の空気が異様に暗く、重いものとなつた。

周りを見ると、先程まで馬鹿騒ぎしていた男たちの表情も固くなつてゐる。

その空気を読んで、俺はこいつ答えた。

「あんたアホか？ 好き好んで死にたい奴なんかそう簡単にいるかよ」

場の雰囲気にあつたナイスチョイスなセリフと思つて俺がそう答えると、場の空気は和やかに……はならなかつた。  
むしり、余計緊張が走つたような気がする。

髭面の男はしばらく、こちらをジッと睨んでいた。  
…………」おおっせんがガチホモだつたりびつしょい。

「テメエ今から俺の質問に答える」

髭面の男はそういう口を開いた。

「だが断る！」

「それを決めるのは俺だ」

な、なん……だと、俺の「だが断る」を打ち破る返し方があつたのか。

髭面の男は別段気にした様子もなく言葉を続けた。

「今お前は、二日間何も食わずに平地を放浪している。

最寄りの町にはもつ少しで着く。

しかし、前から化け物に追われている男がこちらに向かってきている。

男はお前に助けを求めた。

男は報酬を支払うと言っている。

しかし、男を追っている化け物は、今のお前では勝てるかどうか怪しい。

さてこの時、お前はどうする？

「男から金だけ奪つて、その場を去つてしまつたと町で飯を食つ」

髭面の男の禪問答のよつな質問に俺は即座に答えた。

「理由を聞いづか」

髭面の男は、一ひらきを值踏みするよつて見てくる。

「そりやあ、全く見ず知らずの他人のために、命張るわけにも行かないし、その話だと、自分は金を持つていのい可能性が高い。つまり、町にただ着いても食料を確保する可能性は極めて低い。すでに三日も食つてないわけだしな。そしたら、金を持っているやつから有り難く頂いて、ついでにモンスターの身代わりになつてもらう、まさに「一石二鳥」とはこのことだよな。さらに平地で他に誰も見てないところが美味しいよな」

俺がスラスラとそう答えた。

俺の答えにパツチは青ざめたよつな表情をしていた。

しかし、髭面の男はそれを聞いてニヤリと笑つた。

「合格だ」

「なにが？」

「オメエはこれからこの盗賊ギルド『黒猫の宴』のメンバーだつてことだよ」

「は？」

何を言つてゐるでしょうか？」のおっさん。

「嫌だ」

「それを決めるのは俺だ」

「だが断る！」

「無理だ」

「じゃあ逃げる」

「逃がすと思つてんのか？」

髭面の男が右腕を上げると、周りの男達が一斉に立ち上がつた。

「俺の名前はアーカムズ。これからお前のボスになる男の名前だ。覚えておけ」

「四文字以上の名前は覚えられないんだ。悪いね」

「なら覚えさせる。……やれつ！」

アーカムズが上げた右腕を下げるとき、周りの男たちが飛びかかってきた。

俺は焦ること無くひつひつと話した。

「来い。影に生きしもの」『アシカゲシノビ』

「参上仕る。我」『アシカゲシノビ』

何もない空間から顔のない黒ずくめの男が現れた。

襲いかかってきた男たちに動搖が走る。

俺はその好機を逃さない。

「俺を隠せ」

「承った」

そう答えた《アシカゲシノビ》は、両手を活良いよく広げた。広げた両手から白煙と黒煙が立ち、そして弾けた。

「うわ、なんだこの煙！」

「ゴホツ、ゴホツ、ぐそー！」

「何も見えねえ！ちくしょー！」

男たちは急に起きた現象に戸惑い怒鳴りあう。

「全員落ち着け！」

アーカムズの一喝で男たちは落ち着きを取り戻した。だが、彼らの視界が回復する頃には、俺はもういない。

ちょっと禍根を残しそうな逃げ方をしたが、まああの状況では上出来な方だと思つ。

これで、この町の全てのギルドを見て回つた。

さて、どのギルドに入るかは、宿屋で落ち着いて決めよう。そう思いつつ、俺は宿に帰つていつた。

## ギルド・イン

宿屋で一夜を過ぎした俺は、とあるギルドの目の前に立っていた。

採掘者ギルド「掘る者の集い」だ。

……どうせ戦士ギルドとか予想してただろ？

モブの名前も無き受付嬢しか出なかつた採掘者ギルドなんて一片足りとも脳裏を掠めなかつただろ？

でも採掘者ギルドなんだな！これが！

採掘者ギルドをなぜ俺が選んだかの理由は、依頼をこなしているときにも話そつ。

とこいつ」と、俺は採掘者ギルドに登録すべく、その門戸を叩いた。は確か昨日の

「よひこそ採掘者ギルド』ミレラリオ』へ！……つてあれ？あなた登録を頼む

「へ？」

「登録します」

「……本当ですか？」

「本当です」

俺が受付に近づきながらそつそつと、受付嬢は顔を下にむけてブルブルを震え始めた。

……後ろ暗い冷たい薬の副作用か何かだらうか？

俺は心配して声をかけた。

「大丈夫か？」

「のわあ！？」

受付嬢は勢い良く天に向かつて渾身のバンザイをした。

「いやあもうホント助かります！ 最近新しい人が入らないわ、人はどんどん辞めてくわで、大変だつたんですよ」

「そ、そ、う、で、す、か、…」

受付嬢はブンブン俺の手を掴んで何度も振る。

「さあさあ！ ちやつちやと登録を済まして バンバン依頼をこなし  
てくださいね！」

「ああああ

「取り敢えず、この用紙の必要事項を記入して下さい。あ、字は書けますか?」「問題ない」

問題ない

俺は受付嬢の勢いに押されながらも、書類にペンを走らせる。

名前 .....  
年齢 .....  
性別 .....  
住所 .....  
特技 .....  
過去に遭った病気 .....  
ん? .....  
。

「あの

「はい何でしょうか?」

## 「この『性癖』ってのは……何?」

「あ、そ  
れはジ  
ョーク項  
目です

11

「えーと、ほら、うちのギルドって地味じゃないですか。だからちよつとコーカスを入れたほうがいいかなーと思つて、その、私が……」

お前かよ！

つていうかこのギルド大丈夫だろ？今更だが心配になつてきました。取り敢えず、「スカ 口以外は何でも」と書いておこう。

「はい。書けたぞ」

「ありがとうございました」

そう言つて受付嬢は、各項目を田で確認していく。受付嬢が用紙の下の方に田を移して、おそらくせつめのジョーク項目のところで、田の動きが止まつた。そして受付嬢はこちらを向いてニコニコと笑顔を作る。

「ケンイチ様。私、アミニュットと申します」「なぜ今、このタイミングで自己紹介をする……」「以後良しなに……ボツ」「なぜそこで頬を染める……？」

コーカスというか、お前の男あさり用の項目かよ……。

「取り敢えず、早速今日から動くから」

「わあ、助かります」

「そうだな……。薬草集めの依頼はあるか？」

「はい。10件ござります」

「じゃあ全部頼む」

「え？あー申し訳ございません。依頼の同時契約は最大で3件まで何ですよ」

「 そ う な の か 。 ま あ だ つ た ら 3 件 よ ろ し く 「 は い 。 …… え ー と 、 大 丈 夫 で す か ? 」

「 問 題 な い 」

「 そ 、 そ う で す か 。 で は 、 こ ち か か ら 3 件 選 ん で 下 さ い 」

ア ミ ュ ッ ツ ト は そ う 言 つ て 僕 の 前 に 「 依 頼 書 」 の 束 を 置 い た 。  
俺 は ざ わ つ と 見 て 次 の 3 件 を 選 ん だ 。

「 薬 草 1 0 枚 一 束 で 、 5 束 以 上 。 1 0 束 以 上 に は 追 加 報 酬 」

契 約 金 : 8 銅 棒 ギラ

報 酬 : 2 銀 棒 ジラ

「 ポ ー シ ョ ン 製 作 用 の 青 薬 草 を 3 0 枚 」

契 約 金 : 1 ジ ラ 5 ギ ラ

報 酬 : 1 0 ジ ラ

「 緊 急 募 集 ！ 薬 草 を 7 束 」

契 約 金 : 5 ギ ラ

報 酬 : 3 ジ ラ 5 ギ ラ

俺 は 契 約 金 の 2 ジ ラ と 8 ギ ラ と 一 緒 に サ イ ン し た 依 頼 書 を ア ミ ュ ッ ツ ト に 渡 し た 。

ア ミ ュ ッ ツ ト 心 配 そ う に そ れ を 受 け 取 り 、 「 受 託 印 」 を 押 し た 。

「 あ の 、 こ の 3 枚 で す が 、 期 限 が 今 日 と 明 日 の も の で す が 大 丈 夫 で す か ? 採 集 す る 量 も 多 め で す し 」

「 大 丈 夫 大 丈 夫 」

「 そ う で す か …… 」

「 と り あ え ず 、 こ の 薬 草 と 青 薬 草 の サンプル つ て あ る か ? 」

「 え え ！ 現 物 を 知 ら な い で こ ん な に 受 け ち や つ た ん で す か ！ ？ 」

「大丈夫大丈夫」

「も、もう、知りませんよ……」

アミュットはさらに不安な表情のまま奥の扉に入り、薬草と青薬草を一枚ずつ持ってきて、俺に見せた。

薬草は、カエデの葉の形に似たもので、青薬草は、その葉より青々としたものだった。

「これ買い取るからもらえるか？」

「え？ あ、はい。それは構いませんが……」

「んじやま精算四口」

俺はそういってアミュットから薬草を買取った。

「んじやま行つてくるわ」

「……はい。 いってらっしゃい」

「ういいうい」

俺はそう言つて建物から出た。

去り際後ろから、「大丈夫かしら……」といつ声が聞こえたが、まあ待つてろつて。

俺は早速町の外へと進路をとった。

## ギルド・イン（後書き）

今日から時間が出来たので、また更新してきます。

## 召喚術の活用法

町の外に出て、ある程度歩いたところで、俺は召喚をすることにした。

「召喚せしは、『タンサクソウサ』」

「応えしは、我、『タンサクソウサ』」

召喚したのは、この世界に来て一番初めに呼んだ望遠鏡のウニミた  
いな『タンサクソウサ』である。  
俺は薬草と毒薬草を取り出して、『タンサクソウサ』にそれらを見  
せた。

「こいつが生えているところまで案内してくれ」  
「了解した」

そう言つて、『タンサクソウサ』は宙に浮かび上がり回転を始めた。  
そして回転を止めて言つた。

「主が足で、東に1刻ほど歩いた森に入り、さうして300歩直進し  
たところに田標物を複数発見した」

「オッケー。お疲れさん戻つていいぞ」

俺がそう言つと、『タンサクソウサ』はまた何もない空間へと帰つ  
ていった。

俺は早速東に進路をとつた。

森に着き、しばらく歩くと少し開けた場所に出た。

その地には、目的の薬草と同じものがいくつか生えていた。  
しかし、ざつと見た限りだと依頼達成に必要な数は無さそうだ。  
まあ想定済みだけどな。

そう思つた後、俺は精神を集中した。

「解き明かせ、『ブンセキカイメイ』」

「問に答えましょぞ、私、『ブンセキカイメイ』」

俺の呼びかけに応えたやつは、白衣を着た老人で、その背丈は手のひらに乗るサイズ。さらに老人の髭と髪は細かい文字や記号の集合で出来ている。

そして、さりに俺は呼び掛ける。

「恵みをもたらせ、『ホウジョウドジョウウ』」

「育て咲かせよお、オデ、『ホウジョウドジョウウ』」

続いて呼びかけに応えたやつは、俺の一倍ぐらいの背丈で、人の形をとつているが体表は土塊で出来ており、体のあちらこちらに苔や草や花を生やしている。

これぞ、同時召喚なり！

「よし、まずは『ブンセキカイメイ』。この薬草を調べてくれ

「うむ。任せなさい」

そう応えた『ブンセキカイメイ』は、薬草と青薬草を手に取り、眺めるように見ていく。

途中ウンウンと頷き、そして最後は文字や記号で出来た髪と髭が浮かび上がり、薬草と青薬草をそれで包んだ。

「ふむ。解析終了じゃ」

「よし。それじゃあ解析結果を《ホウジョウジジョウ》に渡してくれ

れ

俺がそう言つと、《ブンセキカイメイ》は手のひらから文字や記号が渦巻いている球体を取り出し、それを《ホウジョウジジョウ》の方へ投げた。

《ホウジョウジジョウ》はそれを口から食べてもぐもぐする。

「よし。《ホウジョウジジョウ》。おまえはそれを元にこの辺にそれを大量に生やしてくれ」

「任せたぞおー！」

《ホウジョウジジョウ》は、大きく手を振りかぶり、そして勢い良く地面を叩きつけた。

ドゴン！と鈍く重い音が鳴り響き、そして同時に雑草が生えていた地面は浮かび上がり、瞬く間に薬草が一番良く育つように耕された。そして今度は高く飛び上がり、両足でおもいつきり着地する。すると、なんという事でしょう。

何もない土から薬草と青薬草がわんさか生えてくるではありませんか。

ニョキニョキ、モサモサという効果音が一番適切であるよ、といふスピードで大量に生えてくる。

一言で表現すれば、「国民的アニメ映画の女の子一人がパジャマで夜の外でジャンプしているシーン」である。

「よし。計画通り！ お疲れさん。一人とも戻つていいぞ」

「ふむ。また困つた」とがあれば呼ぶのじゃ

「オオ、腹減つた」

『ブンセキカイメイ』は快く戻つてくれたが、『ホウジョウドジョウ』は戻るのを渋つていて、召喚された者の中には、俺の精神力（仮）以外の報酬を求める」とある。

そういう場合、しつかりそれに応えるのが召喚者とされた者の信頼関係を築くのに重要な点である。

「オッケー。取り敢えず、この辺の木の実を取つてくるから、それまで見張つておいてくれ」

「うん。わかつだぞ」

俺はそう言い残して、森を駆けまわつた。

しばらくして、両手に持てる分だけ木の実や果実を取つて戻つてくると、『ホウジョウドジョウ』の周りには、鳥や森の小動物が休んでいた。

相変わらず、動物に好かれてるなーと思いつつ俺が近づくと、動物たちは敏感に反応し、逃げてしまつた。

少し悲しい。

「ほら。これで腹の足しにしてくれ」

「うおーー。ありがとうだぞう」

『ホウジョウドジョウ』に木の実と果実を渡すと、あつとこいつ間にそれらを食べてしまつた。

「んだ。オデ帰るぞ」

「おう、お疲れさん」

そつと歸つて帰つていつた。

それを見送つた後、俺は軽い茂みのよつこ生えた薬草と青薬草をあ  
るだけ採集して、町へと帰還した。

樂勝樂勝。

こんな樂してノルマ達成とか、ロードマップでメシウマーーー

## 始めての報酬

道具袋がパンパンになるくらいの薬草を持って、俺は再び採掘者ギルドへと戻ってきた。

「おーす。戻ったよー」

俺がそう言しながらギルドに入つてみると受付のアリコットは驚いたような顔をした。

「おかえりなさいケンイチさん。まだ半日も経つてませんが、…まさかやつぱり採集できなくて諦めて帰つてきたんですか？」

アリコットはがっかりとした表情でため息をついた。  
失礼なやつだ。

「まじ。依頼達成だよ」

俺は受付の上にジンサツと薬草でいっぱいの道具袋を乗せた。

「えー？ ほー本当にですか？」  
「疑う暇があつたら確認する方が早くないか」  
「うつーそうですね。では……」

そう言つて、アリコットは道具袋の口を広げて中を確認し始めた。

「うー嘘。これも、これも、青薬草までこんなにー」

彼女は信じられないといった表情で、次々と薬草を確認していく。

俺はその様子を欠伸しながら、眺めていた。

「に、偽物じや、ないですよね？」

「採掘者ギルドの受付嬢なら薬草の真偽ぐらい自分でわかるだろ」

俺がそう言つと、アミコットはつむじてフルフルし始める。  
来るか？ 来るのか？

「あらう」アラウす。二二一。一。アラウす。

予想通りでした。

鼓膜が破れそうなくらいアハハトは大喜びしている。  
と云ふか、今日は跳ねている。

「どうしてですか？こんな短時間でしかもこの量…すうまいじやない

「まあ、俺は有能だからな」

ここまで大喜びされるとちょっと鼻が高くなってしまう。

「まあ取り敢えず、依頼達成の手続き頼むわ」

そう言って、アミコットは満面の笑みを浮かべながら、書類にペンを走らせて、「依頼達成印」を押した。

そして報酬が俺に渡される。

基本報酬：15銀棒、5銅棒  
契約金返金：2ジラ8ギラ  
計：18ジラ3ギラ

俺は取り敢えず報酬を確認して、暑い布袋で出来た財布に入れる。ちなみに薬草は、まだ大分残っている。

「よし。それじゃあ新しく3件の薬草採集系の依頼をくれ

「え？ またすぐに受けれるんですか？」

「まあまあ見とけって」

俺がそう言つと、アミコットは依頼書を持つてくれる。

俺は適当に3件選んで、サインする。

「ほい。受諾印ヨロ」

「あ、はい。契約金も一緒にお願ひします」

「はいはい」

俺が契約金を渡し、アミコットは受諾印を押してこちらに渡す。

そして俺はそれを確認して、アミコットにまた渡す。薬草と一緒に。

「依頼達成印ヨロ」

「え？ あーなるほど。そうこうひとですね」

アミコットは納得がいったのかまだまだ余っている薬草から、依頼分の枚数を抜いて、依頼達成印を押す。

そして俺は契約金と報酬をもらう。

そして、薬草はまだ残っている。

後はお分かりだろう。

以下略

「す・す・す」。10件もあつた依頼が一瞬で……。「ははは、いやー儲かつた儲かつた」

アミコットは「ローロ」しながらも、依頼の消化に驚き、俺も金が儲かつてホクホク顔。

今回の報酬は合計72ジラ3ギラとなつた。

日本円で7万2千3百円。

さらにこの世界は物価が安いから感覚的にはもつと稼いだことになる。

「うわあ、ケンイチさん、す」ことです。本当に

「もつと褒めたまえ。はははー。」

「えりいえらい」

「いや、子供扱いしろとは言つてないのだが

アミコットはなでなでと俺の頭を撫でた。まあ悪い気はしない。

「でも、どうやってこんな量を集めてきたんですか？」

「まあ色々とね。そのへんは」

「えーい、じゃないですか。教えて下さこよ

「いやだ」

「もうー……じゃあ、お姉さんからのお・ね・が・い」

「そんな安いっぽい色仕掛けで俺がなびくとでも？」

「ひどいー。これでも自信あつたのにー……でもそんな硬派なところ

もス・テ・キ」

何故かアミコットはうつとりした感じの田代ひらを見つめてくる。まあアミコットの容姿はまあまあ好みなので、うつと遊ぶべらりながら……

「せつばかり珍しへ騒がしこのつ

俺が良からぬことを考えてみると、ギルドの一階から声と同時に  
ちりて降りてくる足音が聞こえた。

「あー、ギルド長。見てくださいよー。溜まっていた依頼が10件も達成されたんですよー。」

「なにー!? どれ、ちょっと見せてみなさい。」

一階に降りてきた爺さんは、白に焼けた少し汚らしい肌だが、着ているものは小奇麗で、人物と同じく年季の入った重厚感のある身なりであった。

爺さんはアミコシトから渡された依頼書と、俺が採ってきた薬草を眺めて、何度も頷いた。

「ふむ。問題ないの。むしろ薬草は虫食いもなく、全て上質なものじやな」

「わあー。ギルド長が言つなら間違いなく本物なんですねー。」

「まだ疑つてたんかい!」

「えーだつて、こんなに早くこの量の薬草手に入れてくるなんて信じられなくて」

俺がアミコシトを睨むと、アミコシトはまばたいてしゃべる。  
爺さんは俺の方に向き直つてこうついた。

「お前さんは?」

「人の名前を尋ねるときは、まず自分からだう?」

「けー、ケンイチさんー!？」

失礼な爺さんにそう言つと、アミコシトは手をブンブン出でて、振

りながら慌てる。

爺さんはそんな俺の言つたことを氣にもしないように豪快に笑う。

「ガハハ！」りやあまた生意氣な坊主が来たもんじゃな！」

「爺さんも如何にも偏屈そうだな」

「ガハハ！」

「ははは！」

「あわわわわ」

なかなか話のわかりそうな爺さんだ。

ブンツ！

サツ　　スカツ！

と思つたら、爺さんがいきなり木の棒で俺の頭を叩いてきた。まあ避けたけど。

「何すんだよ」

「誰が偏屈じや！失敬なガキじや！」

「ぶん殴つてくる爺さんも大概だがな」

「まあ、腕は立ちそудからな、これからも精々身を粉にして働け

い」

「爺さんが俺の前で膝をついて懇願するなら考えてやるわ。……いや、やめよう。そんな姿を見ても誰も得をしない」

「なに！失礼なやつじや。どれ見ておれ！」

そう言つて、爺さんは俺の前で膝をついて……

「つてなにやらすんじやい！」

「あんたが勝手にやつたんだろつ！？」

「まあ良い。お前さんの頭を引っ張ぱたいてやるから、また明日来い！」

爺さんはやう言つて、ズカズカと一階に帰つて行つた。  
なんだそりやあ？

「ふふふ」

「急に笑つてどうしたアミコシト。頭でも打つたか？」

「もう！そんなんぢやないですよ！ただ、ギルド長が氣に入つた人  
つて久しぶりで」

「え？どう見ても嫌われたようにしか見えないけど？」

「嫌われるようなことをしているって自覚があるなら、しないでく  
ださいよ。心臓に悪いですから」

「どんま」

「もう！でも、ギルド長つて氣に入らない人だと『一度と来るな！』  
いつも言つんですけど、ほりかわさんは『また明日来い！』って言つ  
てたでしょ？」

「ギルド長……なんといつシン『ト』」

「つ、つんで？」

「いや、氣にするな」

「は、はあ」

取り敢えず、このギルドに入つての幸先は良さうである。

「そんじゃま、また明日来るわ。お疲れ」

「あ、はい。お疲れ様です。また明日！」

「あいよ」

そう言つて俺はギルドから出でていった。

幕間

「アリゴシトよ。あの若造はもつ行ったか?」  
「ギルド。いたんなら見送つてあげれまいこの」  
「ふん。最初から甘やかすと面倒じゃからな。あの手の男は」  
「そなんですか?」  
「そうじや」  
「ふふ。でもギルド長つれしあわつですね」  
「嬉しかないわい!」  
「ふふふ。でも本當にこじですよな。初日からこの活躍」  
「確かにのう」  
「ここは、彼がやめないうつに私も頑張りなへりや...」  
「なにを頑張るんじや?..」  
「え!?.そ、そんなん...口ひなんて出せませんよーもー...」  
「.....若こひからそんな方法で男を捕まえるのは止めなさい」  
「えー。若いうちじか出来ないと私は思いますけど。それにケンイ  
チさん。なんだかんだ言つて床では優しそうだし」  
「そつかのう。この登録書からは相当の変態趣味の持ち主のよう」  
「感じのうがのう」  
「それはそれで.....いやん」  
「これから、色々と忙しくなつそひじや.....」  
「あら、忙しことはいいことじやないですか」  
「まあのう」

以上、ケンイチ退出後のギルドの中の会話。

## 一週間後

ゼーの町に到着してから一週間が経った。

その間の経緯を簡単に書き記そつ。

- ・依頼を順調にこなす。
- ・町で部屋を借りた。
- ・町での知名度が「誰だ」いつから「たまに見かけるやつ」へいに上がつた。
- ・教えてもないのに、アミコットが俺の部屋に頻繁に顔を出すようになつた。何これ恐い……
- ・ギルドのじじいと依頼あがりに酒を飲みに行くべりこの仲になつた。
- ・未だにギルドの他のメンバーに会つたことがない。

さて、こんな感じだ。

今現在の俺は、と、今日は近くの開放鉱山（基本誰でも入れる）から依頼内容の品である「鉄鉱石」「天然粘土」を探掘してきて、丁度、ギルドに着いたところだ。

「ただいまー」

「あ、ケンイチさんお帰りなさい」

「ほい、依頼達成の確認ヨロ」

「はい。ちょっと待つていてくださいね」

俺は依頼品をアミコットに手渡すと、彼女は手馴れた手つきで確認していく。

「なあ、アミコット」

「はい。なんですか？ 今日のデートのことですか？」

「んー？ おかしいな。そんな約束はした覚えがないのだが」「私が勝手に決めておきました」

「俺の予定は俺が決めるので却下だ」

「えー。いい加減、手ぐらじ出してくださいよ」

「無理。なんか恐いから」

「ふー」

アミコットは頬を膨らませてむくれていて。

人の住所を勝手に調べて押しかけるようなストーサー（ストーカーな女子）にどうして好意を持つて行為に及べよ？ いや及べまい。

「そんなことよつた。俺まだこのギルドの他のメンバーに会つたことないんだけど……」  
「……それはいりますよ。当たり前じゃないです……」

「じゃあなんで田を反らすんだよ」

「気のせいです」

「いやいや事実ですよ」

何か後ろめたい事情もあるのだろうか？

俺がそんなことを思案していると、一階からギルド長のじじいが降りてきた。

「おうじじい、ちょっと聞きたい」とあるんだけど

「それが、人にものを聞く態度か！」

「まあまあ、そんな細かいことは気にするなよ。俺とじじいの仲じやないか」

「馬鹿もんが！ 親しき仲にも礼儀ありと言つじやうが！ それにお

「安心しゅ。俺だつてじじいでフラグ立てるとか、死んでもお断りするぜ」

「じじいエロとか誰得だよ。

「まあ下らなーことはその辺に置いておこて、俺まだ他のギルドメンバーと会つたことないんだけど、そこつらにつこて教えてくれよ」「ふむ。なんじゃそんなことか。お前さんの他に一人あるぞ。以上！」

「説明みじかっ！しかも少なつ！」

「じゃかあしきーつけは少數精銳なんじゃ！」

おそれらく、このじじいの氣難しさに多くのメンバーが去つて行ったに違いない。

美少女のシンデレラはまだ許容できるし、時と場合によっては、むしろ好感さえ抱く。

しかし、誰が好き好んで小汚いじじいの元で働きたがるか、しかも無意味に若干シンデレラ……、ウザヤー200%！って感じだな。

「じじいが全て悪い」

「なんじゃとー！」

「もつとじじいが近所に住むよつた当たりの柔らかい老人みたいな性格だつたら、きっとこのギルドはもつとメンバーが増えるだろつ。完」

「勝手に終わらすんじゃないーそれに余計なお世話じや。中途半端なやつが来られても困るからのつ」

「それは言い訳だろつ。」

「まあでも、そのピンチに現れたのが、この俺ってわけだ！感謝しろよー！」

俺がそう言つと、アリコットはうんうんと頷いているが、じじいは苦虫を噛んだような顔をしている。

「ふん。お前さんがいなくとも、このギルドはやつてけるわい。自惚れるじゃあない」

「あ、そ、じゃあ俺辞めるわ」

「え？」

「は？」

「世話になつたな。それじゃあ、お元氣で！」

「ちよ、ちよつと待つてくださいよー、ギルド長ーーー！」

「ああああああ、落ち着くのじゃあ、」

お前が落ち着けって。

俺は慌てた様子のじじいを見てほくそ笑みながら、一人の方に振り返つた。

「冗談だよ。冗談」

「な、なんじや。紛らわしい……」

「もう、もうこうつ「冗談はやめてくださいよー」

つてか一人のリアクションを見て、如何にこのギルドが窮地に立たされているか分かったような気がする。本気で辞めるか検討しなくてはいけないな。

「さて、今日まだ口が出てるし、簡単な依頼でもしようかな」「はい。あ、でも溜まっていた依頼のほとんどは悉くやつで、終わつたんでした。今は依頼待ちの状態ですね」

「あーそつなんだ。そんじゃ暇つぶしに町でもぶらぶらしますかねー」

俺は体を伸ばしてそつばく。

「若いもんが毎回つから遊ぶもんじゃないわい。ほれ、新しい依頼じゅみ」

じじいは懐から封に入った依頼書を取り出して、俺に手渡した。それを見たアミコットは軽く目を開いて驚いた表情を見せた。

「珍しいですね。ギルド長に直接依頼願いが出されるなんて」「まあのつ。協働依頼じゅから、わしのサインがないと受けれんからのう」

「協働依頼なんて久し振りですね」「なあ、協働依頼ってなんだ?」

俺がそう聞くと、アミコットはじゅらを向いて説明を始めた。

「あ、協働依頼ってこいつのは、つひのひのギルドと他のギルドや施設が協力して行なう依頼のことです」「へえ、そんなのがあるのか」「まあ、他所のギルドは結構あるんですけど、うしの場合は割りと一人でこなせるものばかり扱っているので」「なるほど。確かにね」

つまりその協働依頼つてのが俺に回ってきたことが。

「まあ、お主は口は悪いが腕は確かのよじゅからなのう。ものば試しどこうわけじゅ」

「褒めるなら素直に褒めろよ。周りくどい」

「つるわいのひ。ぬ前さんみたいのは、そりやつて付け上がるから  
こいつとしても素直に褒めれんのじゃー」

「はいはい、気をつけるよ。んで、どこのギルドとの協働依頼なん  
だ?」

「戦士ギルドとじや」

「ふーん。依頼内容は?」

「自分で読むんじゃな。わしは疲れたから部屋に戻る」

「あ、おい」

じじいはそう言い残すとのつそと一階にあるだらつ自分の部  
屋に戻つていつた。

「なんだ。あのじじい」

「取り敢えず、依頼内容の確認をさればどひですか?」

「それもそつだな」

アミコシトに促されて、俺は依頼書を確認するために封を開けた。

依頼内容はこつだ。

依頼形態：協働

依頼内容：バーレーイ山の中腹に生息する月光草を3枚採集

注意：1・月光草は数が少ないため、3枚以上の採取は行わないこ  
と。

2・途中、町近郊には生息しないような凶暴なモンスターが  
いる可能性あり。

契約金：10銀棒

報酬：1金棒（セラ経費も含んで）

依頼内容を確認した俺は、初の金棒報酬の依頼に少しワクワクしてしまった。  
報酬が高いことについてはそれだけ、依頼の難易度が高いことだ。

「なあ、アミコット」

「はい何でしょ？」

「協働依頼の場合の報酬の分け前ってどうなんだ？」

「ああ、それは大丈夫ですよ。こちらの依頼書に書いてあるのが、うちのギルドで支払われる報酬になります。他のギルドの方はそのギルドの依頼書に書かれた報酬を受取るはずです」

「なるほどね。……でもこういうことは、ギルドによって報酬額が違う可能性があるのか？」

「はい。そうなりますね」

「依頼の報酬額のことは、他のギルドのやつに言わないほうがいいかな？」

「そうですねー。面つても基本的には、そういう仕組みであること、を理解して依頼を受けているはずなので、問題ないと私は思いますが、聞かれない限りは答えなくてもいいんじゃないですか？」

「それもそうだな」

下手なイザコザは「メンだしな。

「よし。それじゃあこの依頼受けれるよ  
「はい。わかりました。それでは受諾印を押しますね

こうして、俺は他のギルドとの初の協働依頼を受けることになった。アミコットが確認したところ、戦士ギルドの方でも依頼受諾が成立

したそのので、夕方から出発することになった。

アミコットには勝手に俺の部屋に侵入しないように言い聞かせておいて、おそらく依頼中に野宿をするだろうから、その準備のために町の商店へと向かうべくギルドを後にした。

## 依頼開始と新たな出会い

日もいい具合に傾き、夕日が暖かく町を包み始めた頃に、俺は町の門の前まで来ていた。

「そもそも戦士ギルドのやつが来るはずだけど、……まだか」

俺は周りを軽く見回すが、それらしい風貌のやつはまだいなかつた。今回の依頼を脳内で確認しておこう。

依頼内容は、ハーレーイ山の中腹に生息する月光草を3枚採取することだ。

ハーレーイ山はゼーの町から西に歩いて1日行ったところにある標高800メートル程度の山だ。

山までの道のりはそれほど危険はないが、山の麓にある森には町の周りにいるモンスターより危険なものが徘徊している。

依頼の月光草は、夜に月明かりのような淡く白い光を発光する植物である。

月光草は一枚を抽出するだけで、ポーションと同じ効き目のものを150～200個作れるという貴重な植物である。

月光草を濃い濃度で抽出すれば、大抵の病気は治る特効薬が作れるそうだ。

まあ価格はとんでもない額になるだろう。

これが、野宿の準備をするために立ち寄った道具屋で聞いた内容だ。道のりと月光草の搜索を含めるとだいたい3日ぐらいの依頼となるだろう。

今回は実物を持つていなく、《タンサクソウサ》は使えない。

また実は『タンサクソウサ』は夜目がきかない。夜にしか月光草はその特徴を現さないので、使ってもくたびれ損なのである。

「あの、もしかして採掘者<sup>リクリコオ</sup>ギルドの方ですか？」  
「ん？」

思考の海に潜っていた俺に誰かが話しかけてきた。

そちらに目をやると、そこには外套を被り、その中には軽装の鎧を身につけた少女がいた。

背丈は俺のより頭ひとつ低く、背中にはその背丈に不釣合<sup>ハマ</sup>な大剣を背負っている。

あえて特徴をあげるとしたら、顔にはまだ幼さがありありと残っていて、クリつとした丸い目と丸みのある赤い頬、丸い形の耳というなんというか「丸い」少女だった。

まあ体型を見るかぎり、太っているとかぽつちやりしているところでは無いことが分かる。

俺は少女の問いに答える。

「そうだが、あんたは？」  
「あ、私は戦士<sup>ドーテン</sup>ギルドの五番隊所属の二ノンです」  
「俺は採掘者<sup>リクリコオ</sup>ギルドのケンイチだ。よろしく二ノン」

俺は二ノンと名乗った少女に手を差し出す。

「よろしくお願ひしますケンイチさん」

その手を二ノンはとつて、互いに握手をした。

「そちらの依頼の確認だけど、ハーレーイ山での月光草採取で間違

いないか?」

「はい、そうです」

「よし。それじゃあ早速だけど出発する。準備は出来ているか?」

「はい、大丈夫です」

「オッケー。それじゃあ出発だ」

「よろしくお願ひします」

そうして、俺達はゼーの町を後に、ハーレーイ山を西指し、出発した。

途中、退屈じのまに一ノンと仲間話をしながら歩いていた。

「なあ二ノン。わざと五番隊所属って言っていたけど、エイルが隊長をやつてこいる隊か?」

「そうですよ。ケンイチさんの事はエイルさんから聞いていましたので、門ではすぐに見つけることが出来ました」

「へー。エイルは俺のことなんて言つてた?」

俺がそう聞くと、二ノンは少し言ごりたうに苦笑交じりに答えた。

「……その、『初対面から物怖じしない、一歳の割に図々しそうな男の子』と言つてました」

「……ほづ」

「わ、わたしが言つたんぢやないですよー!」

「わかってるよ。……でも、それを参考に俺を見つけたんだり?」

「うつ、その、話しかけた時に、ちよつと参考」

「なるほどなるほど」

「あつあつ」

俺が無表情に頷くと二ノンは気まずそうに慌てた。

まあ、いつも何回も世界を回っていると、誰に対しても一瞬に挨拶をするような謙虚さは無くなるつてもんだ。

自分の図々しい態度は自覚はしている。

「まあ、怒つてないよ」

「や、そうですか。よかつたー」

俺がそう言つと、二ノンは安堵したように息を吐き出した。

「話を変えようか。戦士ドーテンギルドにはいくつぐらい隊があるんだ?」「はい。全部で5部隊で、だいたい1隊につき3~4名が所属しています」

「それじゃあ5番隊が一番新しい部隊なのか?」

「そうですね。私がギルドに入ったことで、設立された部隊なので、」

「それじゃあ二ノンはまだ新入りってことか?」

「そうですね。つていっても、もう半年経つんですけどね」

「俺なんかまだ一週間だから二ノンに比べたら、新入り中の新入りだな」

「ふふ。なんですかそれ」

二ノンは微笑む。

「ところで二ノンやエイルの他に五番隊には誰がいるんだ?」

「後はアポリさんという女性が一人いて、三人で五番隊です」

「ということは、五番隊は全員女性なんだな」

「はい。といっても、戦士ドーテンギルド所属の女性はこの三人なんですね」

「……やっぱり男所帯なんだな」

言つなれば、むさこ男の園に咲く3輪の花といったところか。

「それはそうですよ。私たちのような女性が戦士ギルドに入る」と  
自体珍しいですからね」

「ということは、二ノンは腕には自信があるんだな」

「はい」

「お、そこは謙虚にならないんだな」

「ふふ、それが売りの戦士ギルドですからね」

「はは、そりやそつか。頼りにしてるよ二ノン」

「はい！任せて下さい！」

二ノンはドンと自分の胸を叩いて満面の笑みでそう答えた。  
まあ見た田だけなら、ちょっと背伸びしている女の子にしか見えないけど、ここは二ノンの腕を信じよう。

そういう話して歩いてくると、夕日が地平線に沈みかけていた。  
そろそろ野喰の準備を始めるか。

依頼開始と新たな出会い（後書き）

明けましておめでとう御座います。  
謹んで新年のお慶びを申し上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3096z/>

---

世界を渡る召喚士

2012年1月5日22時52分発行